第9回　鳥取まいぶん講座

因幡の中世城館

ー因伯の境目の気多郡を中心にー

令和元年12月21日
埋蔵文化財センター

今回お伝えしたいこと

（1） 境目の気多郡など、緊張状態が高い地域には山城が多い。

（2） 天正８･９年の秀吉軍の鳥取城攻めまでの因幡前史において、

①尼子再興戦の影響や毛利の影響力の低下、山名豊国の武田高信、毛利方への巧みな対応。

②天正７年の羽衣石城の南条氏の毛利陣営からの離反と毛利方の荒神山城の拠点化が気多郡にも大きな影響を与えた。

（3） 狗尸那城は、

①亀井茲矩が鹿野城に入城する前の一時期、鹿野城と呼ばれた時期があった。

②但馬山名→毛利方→亀井氏の関与が想定されるが、因幡にはない技巧的な山城構造。

③天正８・９年の織田毛利戦争でも重要な役割を想定、亀井氏の鹿野城入城後も狗尸那城として機能。

⇒鹿野城関連城郭として史跡指定も想定。

はじめに

（1）中世城館調査の歴史

- 1818（文政元）年　郡絵図と因伯古城跡図志を作成。
  因幡68城　伯耆33城

- 1998～2003（平成１０～１５）年度に悉皆分布調査の一環で実施。
  ⇒因幡292城　伯耆212城

- 遺漏や錯誤、成果の検討も不十分で、今回の再調査をスタート。

（2）今回の調査研究

①目的

９月１日考古学フォーラムでご説明

②進め方

・中世城館調査は、文献や絵図、地籍図の調査、縄張り調査、発掘調査　など多様な方法により各分野で実施

・当センターでは、

現地踏査による縄張り調査が中心（必要に応じて発掘調査）

他県の発掘調査成果を参考

先行研究を参考、県内外の研究者、文献や絵図等の専門家から指導助言

枠にとらわれず学際的に、大胆かつ積極的に進めています。

また、調査対象とした中世城館については、なるべく皆さんを現地に案内します。

（3）再調査の成功祈願

・郡代加藤主馬は郡絵図と古城跡絵図の作成を命じ、文政元年に完成させた。

・加藤は地方の田畑の大改革を行い、文政元年には田畑字限画図、田畑地続帳を完成して耕地整理、農政改革に大功を立て、家老格にまで列せられた。

・加藤家が知行地としていた国府町吉野に見事な自然石の墓が建てられている。（『国府町誌』より）

加藤主馬墓碑（鳥取市国府町吉野）

戦時の緊張と城の分布

〇城館の密度（城館数／㎢）

旧市町村単位

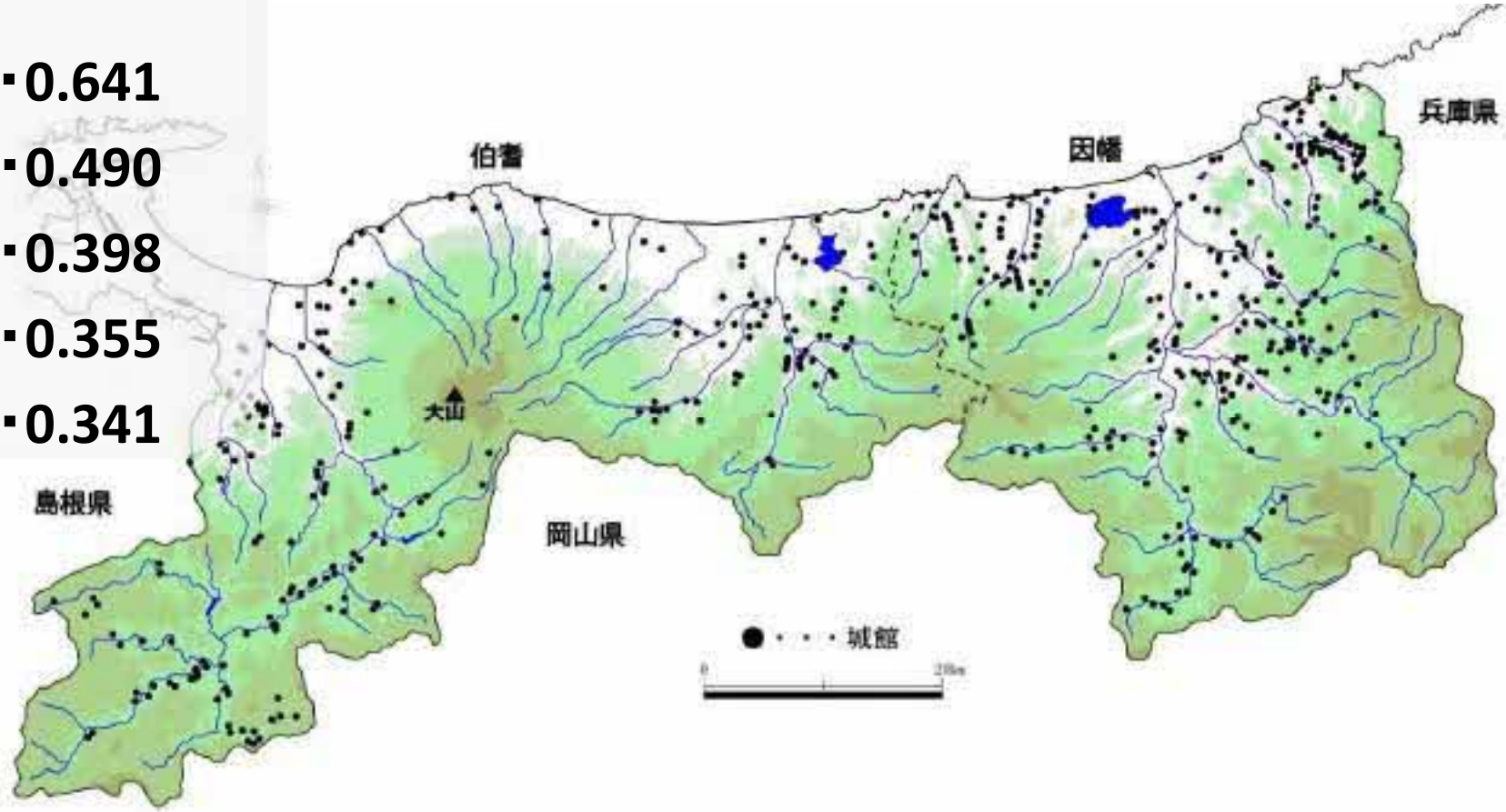
第1位　気高町・・・0.641

第2位　岩美町・・・0.490

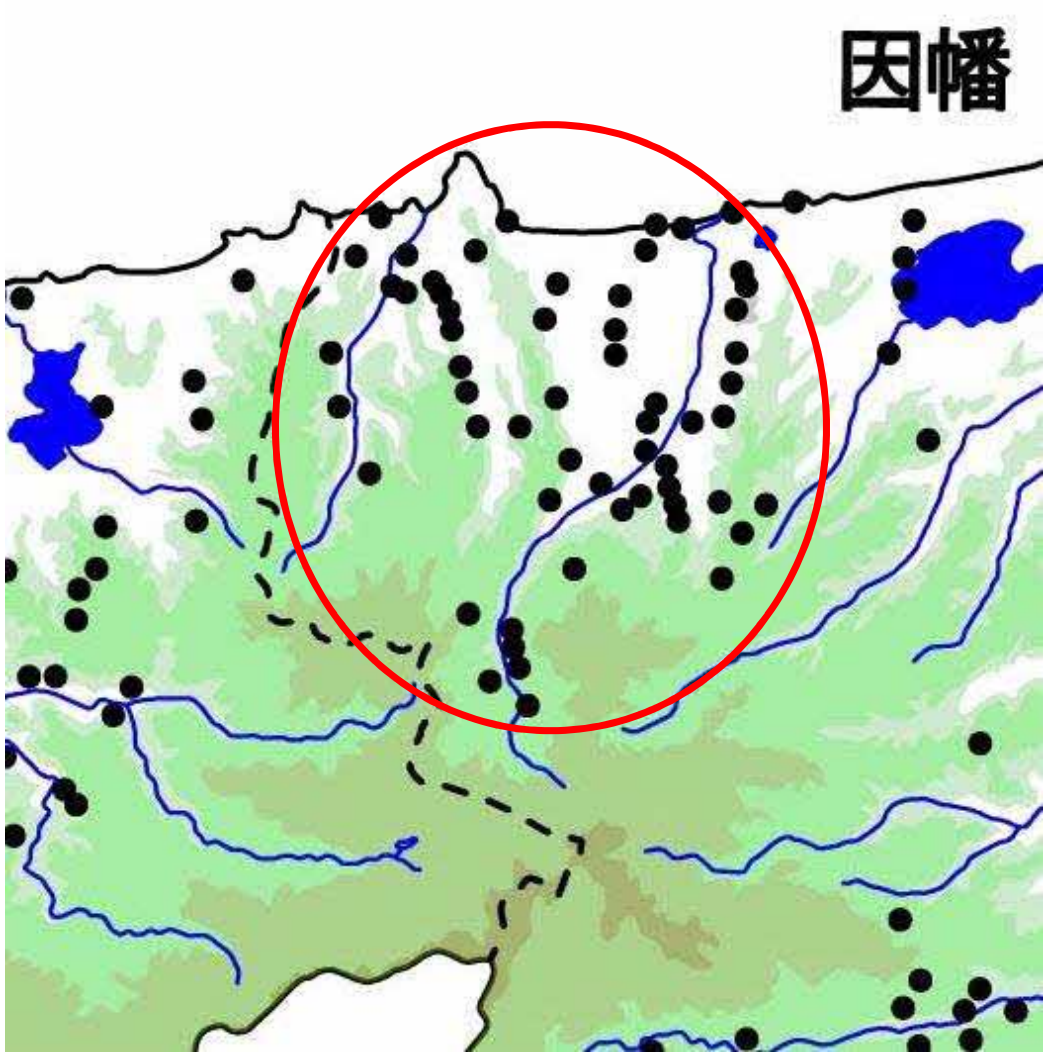
第3位　郡家町・・・0.398

第4位　会見町・・・0.355

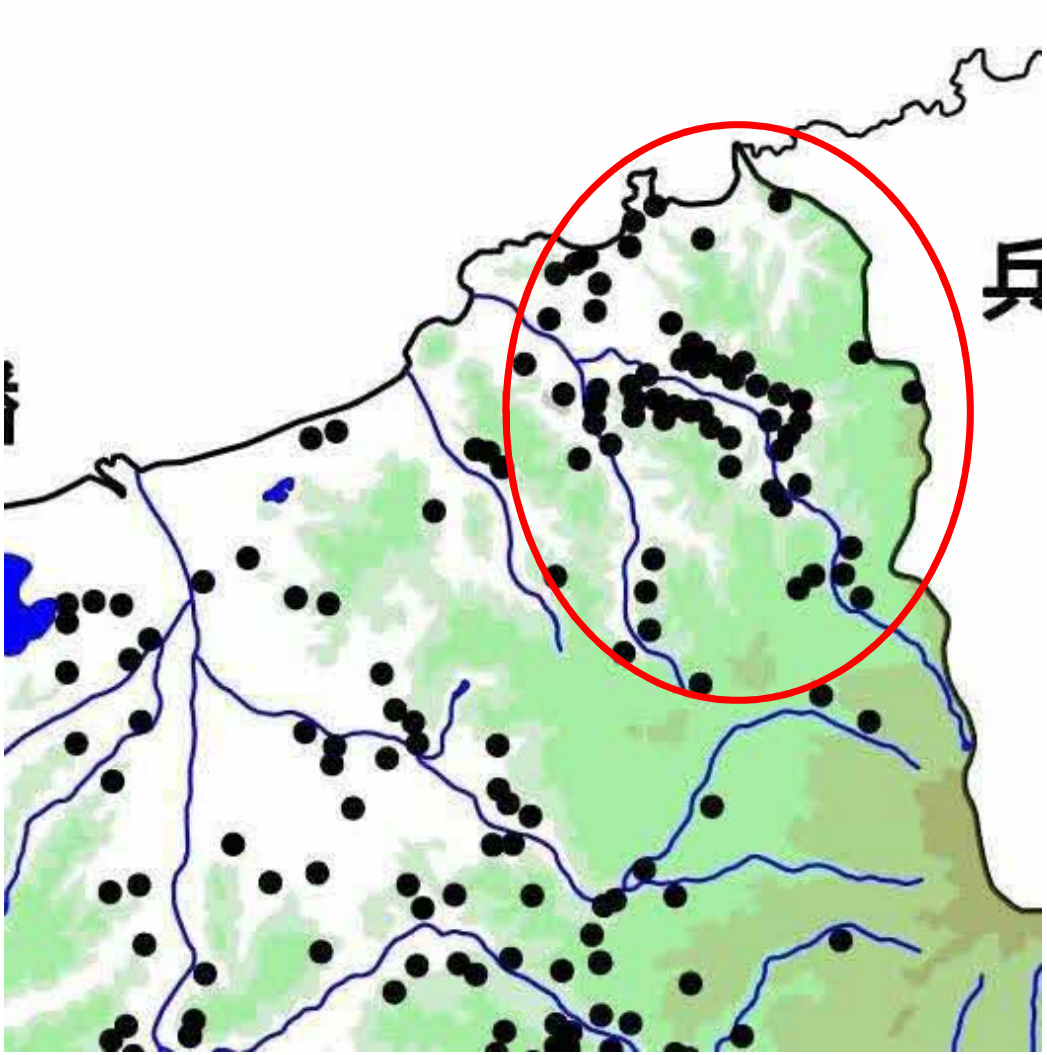
第5位　鹿野町・・・0.341

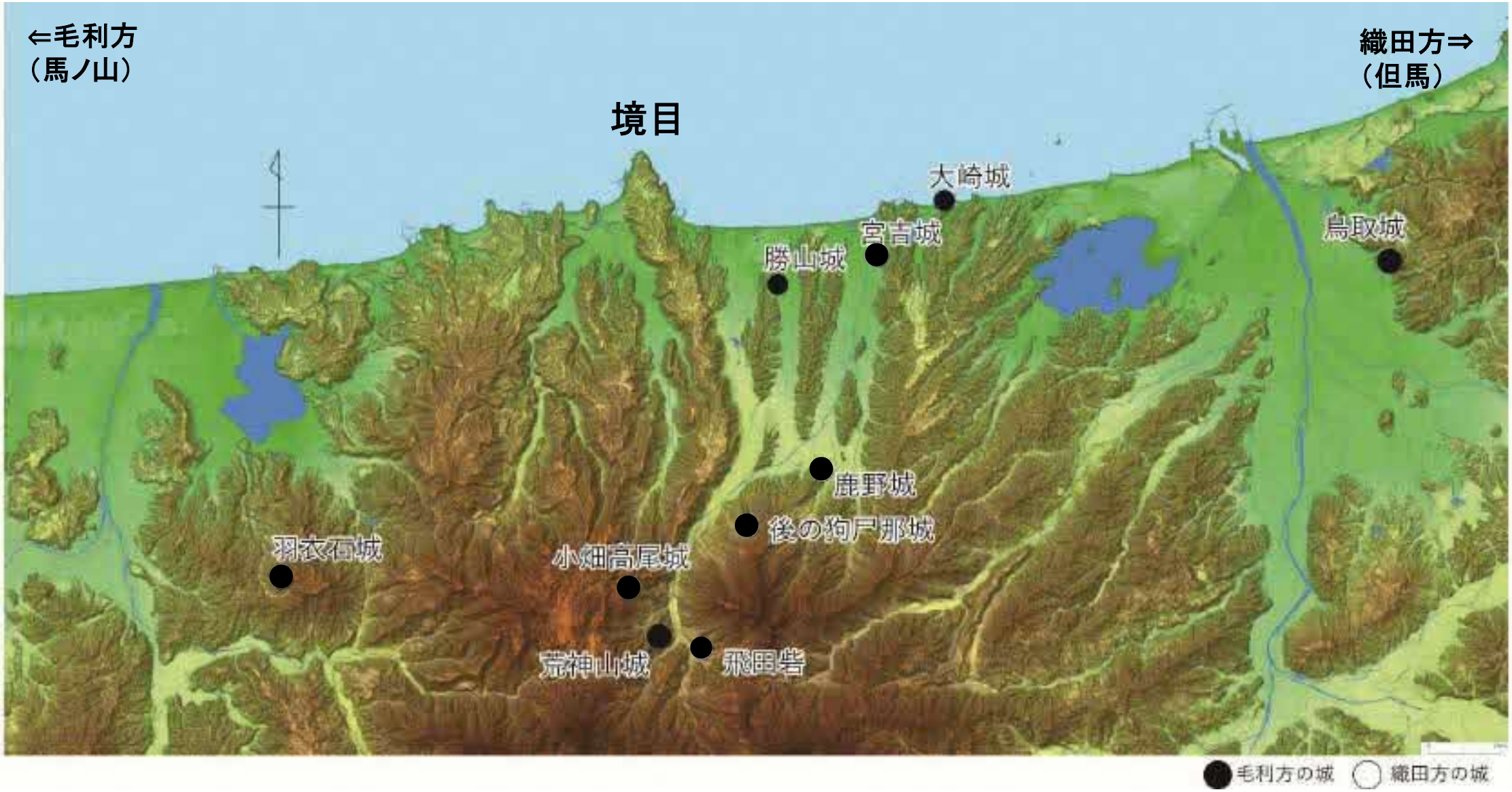


因幡・伯耆の境目　気多郡
（気高町・鹿野町・青谷町）・・・58



因幡・但馬の境目　巨濃郡
岩美町・・・60




⇐毛利方
（馬ノ山）
織田方⇒
（但馬）
境目
大崎城
宮吉城
勝山城
鳥取城
鹿野城
後の狗尸那城
羽衣石城
小畑高尾城
荒神山城
飛田砦
毛利方の城
織田方の城

宮吉城

- 主郭南端にL字形の土塁（高さ1.2m、幅3.5m）
- 「気多郡母木村繪図」に内堀、そと堀
- 田公氏在城
- 海上交通の要
- 毛利氏関連

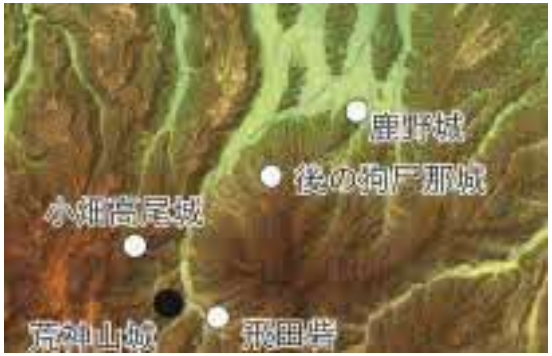
　一時期亀井氏により調略

勝山城

- 長大な曲輪
- 北端から日本海を望む眺望
- 随所に設けられた竪堀
- 毛利方の付城

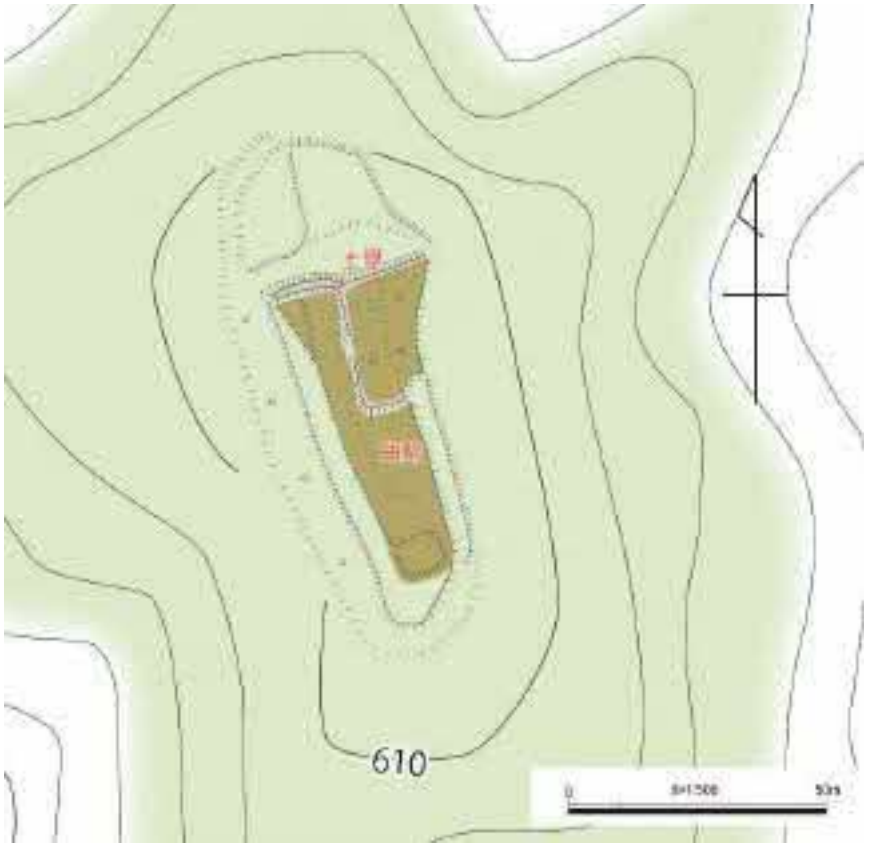
荒神山城

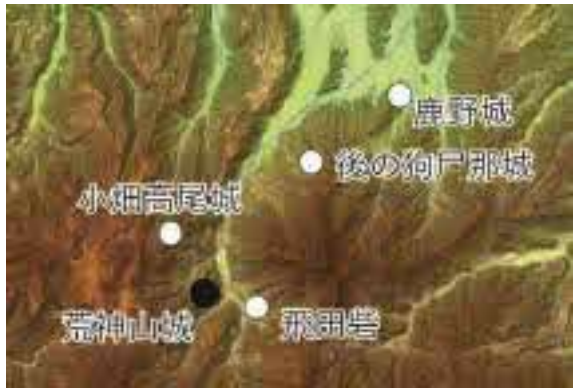
- 長大な主郭（長さ170m×幅25m）
- 峠道（滑石峠、佐谷峠）を押さえた国境の城
- 眼下の河内谷、北側（日本海）への眺望
- 毛利氏による拠点化
- 織豊系の特徴無し
- 関連資料（備前焼徳利、矢田城主の遺品地元に）



小畑高尾城

- 方形にめぐる低土塁（高さ0.3m程度、幅1.5~2.0m）
- 虎口、櫓台か
- 削平の甘い平坦面
- 織田方の陣城か
- 荒神山城が見える



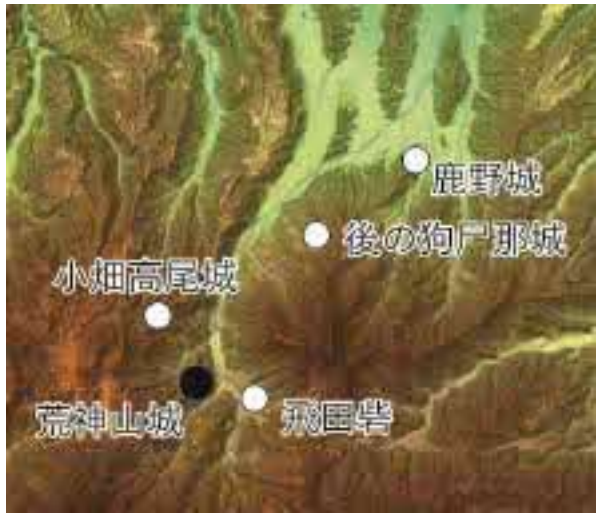


飛田砦

- 三辺に土塁、浅い堀めぐる
- 土塁内は自然地形を残す
- 織田方による陣城か
- 荒神山城が西正面に見える

鹿野城

- 山頂から北側は近世城郭に改修
- 鞍部の東谷に竪堀
- 流山の堀切
- 毛利氏の荒神山や海岸部の付城は見えない
- 志加奴入道→（古城）→毛利再建
  →亀井改修

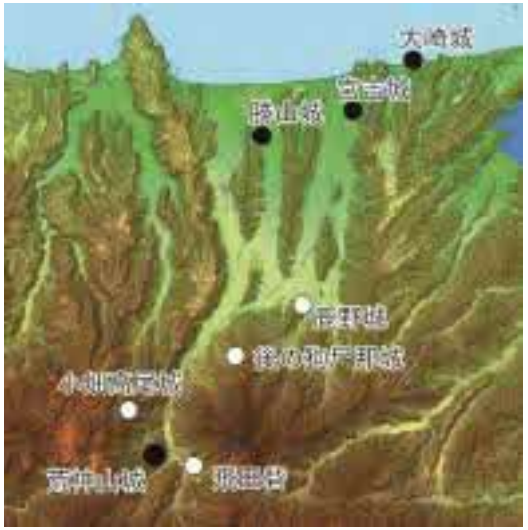


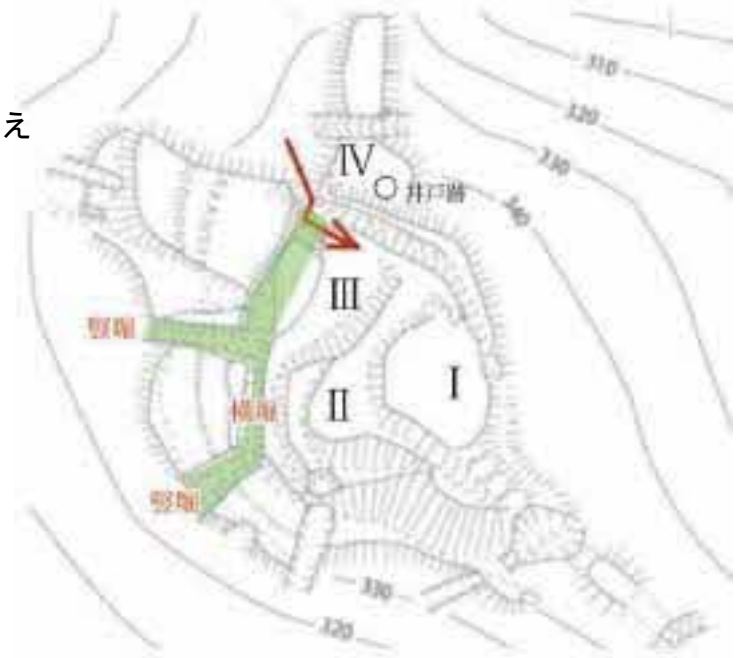
狗尸那城

- 主郭Ⅰ、曲輪Ⅱ～Ⅳ
- 横堀（曲輪Ⅲの北西）
- 横堀に接続する竪堀
- 荒神山城は見えない。

  毛利氏の海岸部の付城見える
- 因幡有数の技巧的城館
- 但馬山名→毛利→亀井の関与
- 立地：対荒神山城の前線基地か

毛利氏の付城、勝山城、大崎城、宮吉城への押え





二つの鹿野城

- 「鹿野城の所在不明」、訝かる向きもあろうが、同城はある時期複数存在したらしい（並列はしていない）。（引用　高橋正弘1986『因伯の戦国城郭』）
- “鹿野”という名称で、特定の城を固定的に考えるのは危険。

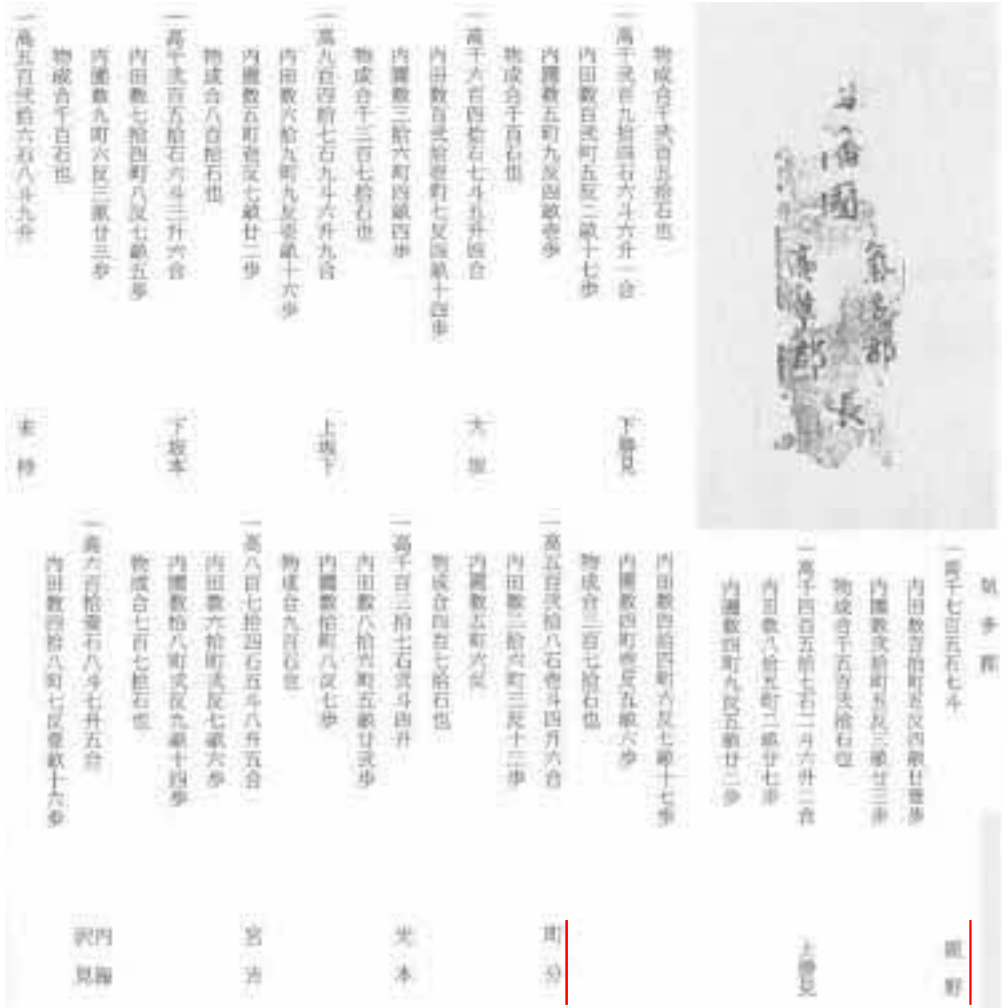
（引用　高橋正弘1986『因伯の戦国城郭』）

- 近世初頭の村切以前　河内・鷲峯は鹿野郷

近世の村は村請制といわれ、年貢収納、夫役の調達、村内の治安維持にいたるまで、すべてが村を基本にした連帯責任性がとられたが、その村は中世的な系譜を引く村落ではなく、近世に入って村切りがなされ、行政単位となる村が作られた。

- 『因幡国気多郡高草郡郷帳』（慶長10年）に「鹿野」、「町分」の記載
→河内・鷲峯は中世期に鹿野と呼ばれても不思議でない。

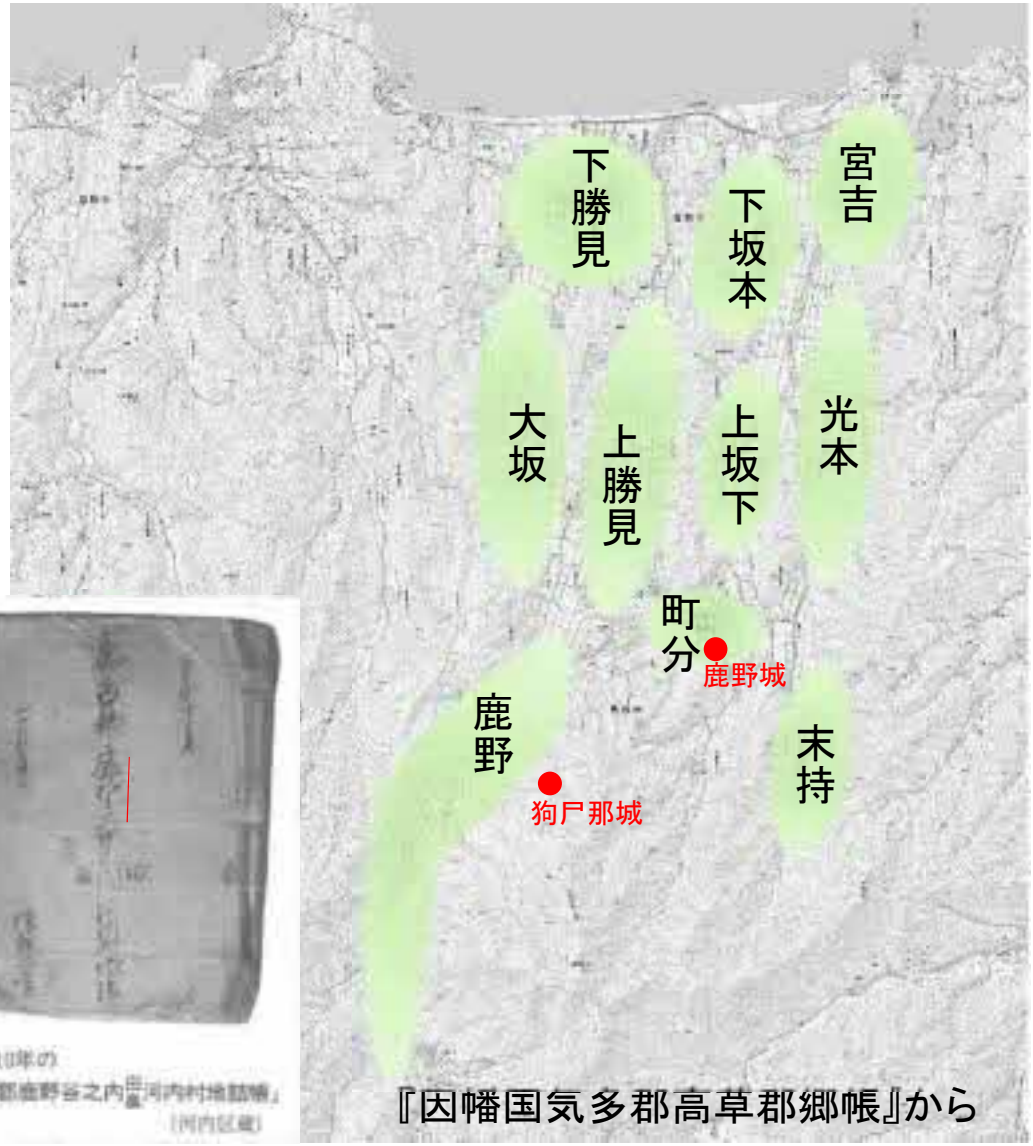
鹿野郷



『因幡国気多郡高草郡郷帳』（鳥取県立博物館所蔵）

鹿野町誌編集委員会1992『鹿野町誌』上巻　鹿野町

寛永10年の
「気多郡鹿野谷之内[illegible]河内村検地帳」
（河内区蔵）



『因幡国気多郡高草郡郷帳』から

少なくとも永禄期を中心とする時期に別の鹿野城が機能しているらしい

- 現鹿野城が古城化していた時期があったことは1次史料に見えるが、古城化する時期としては、天文１３年の尼子軍による鹿野城攻略後とする見解に加え、近年では天文１５年の尼子氏による戦略的破壊の可能性も指摘されている。（高橋正弘氏「戦国因幡と武田一族―中編―」）
- 古城化した現鹿野城に代わり得る城郭は、立地や縄張り等から見て、鹿野所在城の中では狗尸那城と荒神山城しか考えられない。史料上における名称が安定していること、立地から来る逆の観点などから見て荒神山城は外してもいいと考えられる。→後の狗尸那城は当時の鹿野城。
- 「因幡誌」には狗尸那城に山名弾正が居城したとあるが、但馬山名が因幡山名を倒して因幡を傀儡化し、因幡山名氏滅亡前後に因幡に派遣された山名豊定（但馬守護山名祐豊の弟）の官途を弾正小弼・弾正大弼とする2次史料（「寛政重修諸家譜」）もあり、ある程度の整合性が認められる。

- なお、戦国時代の鹿野には但馬守護家山名氏に属する山名一族が領主として君臨し同時に気多郡を統治しており、気多郡に但馬守護家の勢力が扶植されていたとされる。（小坂博之「因幡鹿野城の発掘」『中世の考古学』）

- １次史料では元亀２年に武田高信が鹿野新山から小畑に出陣し合戦したとあるものが、「因幡誌」では元亀天正の頃、小畑高尾城が狗尸那城の山名弾正と攻め合いとある。山名弾正などの但馬山名勢は、既に毛利勢により永禄８年頃には因幡を退去しており、狗尸那城は王舎城、金剛城といった領内の城や河川と同様に、亀井茲矩が仏教に因んで付けた名称であり、亀井茲矩が鹿野城に入城する前は狗尸那城と呼ばれていたはずはない。後世に狗尸那城と呼ぶようになった城は、当時因幡では鹿野新山と呼んでいたものと推測され、両城の位置関係から見ても妥当であると考えられる。なお、因幡の国外の人たちからは従前のとおり鹿野城と呼ばれていたのではないかと推測される。

尼子因幡ノ國發向之事

斯クテ天文十三年二月中旬尼子修理大夫晴久ハ雲伯兩國ノ軍士三萬餘騎ヲ引卒シテ伯州入海ノ城ニ著キ、是ニ暫時逗留シテ、初夏ノ比因幡國ヘ發向セラレケレハ、當ナテ其威風ニ恐怖シ大崎ノ城ノ敵城ヘ（ヌ）シテ開キ退リケル處ニ、是ヨリ鹿野城ヲ取リ巻キ一時カ間ニ攻メ破リ、鹿野入道已下三百餘人ヲ討取ラテ大ニ勇ミ悦ヒ、ソテ鳥取ノ山下ヲ放火シテ當國ヲ私部カメ一國ヲ沈落セシテハ國中ノ敵城共ハ皆狼狽セルヘキトテ、軍評定有リケル所ニ、定久ノ舎弟以テノ外ニ病シ付キテ療治ニ及フ由、種々言上セシカハ、同五月上旬國境ヲ立テテ雲州ヘ歸リ給ヘケリ。

香川正矩編『陰徳太平記』

九五〇　武田高信書状写　山田家古文書　五

去十五日従（気多郡）鹿野新山至（同）小畑罷出候処、御家来衆則時被懸合、敵数多被討捕之段、寔連々御心遣之故、於我等本望候、何度自是以使者可申入候、委細同（武田）名丹後守可申候、恐々謹言、

十一月十七日　　武田　高信　花押

山田出（重直）書守殿　御返報

○本文書は年未詳であるが、永禄九年～元亀二年の間に出されたものと推定されるので、しばらくここに収める。

九七〇　毛利輝元書状（折紙）　野村家文書

因伯為仕切之城、（気多郡）鹿野古城可取付候と申事候、就夫最前如申聞候、彼城可在番事肝要候、普請之儀者則可出来候之条、其方支度不可有油断候、猶従両三人可被申候、謹言、

（天正九年）九月廿六日　（毛利）輝元（花押675）

野村信濃入道殿（士悦）

鳥取県『新鳥取県史資料編』古代中世古文書下　2015

○狗屍那城

村の下にある竹山なり山名彈正と云ひし國侍居城せしと小畑高尾の城主嶋崎某と攻合ひしかとも互に勝負決せさりし處に鹿野の龜井氏に攻破られ斷絶せりとなり城の下を古佛谷と號す

鷲峰の出村有て両村の間の山なれは古佛谷の城とも云ふ今は禁山となり竹林鬱葱として構の樣子知れす

安陪恭庵『因幡誌』世界聖典刊行協会1981

これを分かりやすく整理すると、

出　典	年　代	当事者	合戦した両城	
一次史料	元亀2年	武田高信	鹿野（新山）	小畑
二次史料（因幡志）	元亀天正の頃	山名弾正	後の狗尸那城	小畑高尾城

また、地形図で両城の位置関係をみると、

・2次史料における口碑伝承を考慮すると、

ある時期の鹿野城＝後の狗尸那城

２つの鹿野城になると、歴史はこう塗り替わる

- 戦国時代後期における鹿野城及び関連城郭など因幡の主要城郭の動向（PDF）

その後の鹿野城

- 鹿野古城は天正元年に毛利輝元が、鹿野城（後の狗尸那城）在番の野村士悦に、「因伯仕切りの城」として再建命令

- その後再建された鹿野城（現在の鹿野城）は亀井茲矩が近世城郭に改修

  関ケ原の役の後、慶長６年から１２年にかけて近世城郭として天守から城下町までを一気に建設した。（『中世の考古学』「因幡鹿野城の発掘」小坂博之）

終わりに

〇今後、当面の調査研究は、

- 鹿野城の中世遺構を再度現地踏査
- 鹿野城、狗尸那城の取付に関与した可能性のある者、類似の遺構がある山城を調査
- 東伯耆の山城の現地踏査

〇来年3月以降、地元との協働で山城の現地案内を再開

現時点ではまだ調整中ですが

- 因幡　天神山城周辺・出城、狗尸那城、鹿野城（中世部分）、勝山城、鷹山城
- 伯耆　岩倉城、市場城、打吹城、茶臼山城、黒坂城

今回お伝えしたこと

（1） 境目の気多郡など、緊張状態が高い地域には山城が多い。

（2） 天正８･９年の秀吉軍の鳥取城攻めまでの因幡前史において、

①尼子再興戦の影響や毛利の影響力の低下、山名豊国の武田高信、毛利方への巧みな対応。

②天正７年の羽衣石城の南条氏の毛利陣営からの離反と毛利方の荒神山城の拠点化が気多郡にも大きな影響を与えた。

（3） 狗尸那城は、

①亀井茲矩が鹿野城に入城する前の一時期、鹿野城と呼ばれた時期があった。

②但馬山名→毛利方→亀井氏の関与が想定されるが、因幡にはない技巧的な山城構造。

③天正８・９年の織田毛利戦争でも重要な役割を想定、亀井氏の鹿野城入城後も狗尸那城として機能。

⇒鹿野城関連城郭として史跡指定も想定。